

ハドソン川の奇跡

IPA顧問 松田 晃一

もう一年ほど前になりますが、トム・ハンクス主演の「ハドソン川の奇跡」という映画が公開されました。ご覧になった方も多いと思いますが、実際に起きた飛行機事故の後日談を映画化したものです。

■ ハイテク機も野鳥の一撃で制御不能に

事故は2009年1月にニューヨーク・マンハッタンの上空で起こりました。離陸直後のUSエアウェイズ機にバードストライクが発生し全エンジンが停止。最先端技術の塊であっても、野鳥の一撃で一瞬にして破壊され危機的な状況に追い込まれるのですが、機長の冷静な決断と沈着な行動によって、ハドソン川に不時着。乗員乗客155名はもちろん、ほかに一人の犠牲者も出さず、奇跡の生還を遂げた事故。ハドソン川の奇跡として全世界に報道されたのでご記憶の方も多いのではないでしょうか。いかに最先端技術で造られた航空機であっても、人工物は自然には勝てないことをあらためて思い知らされた出来事でした。最後は人間の知恵と勇気が惨事を救ったわけで、人間の力の偉大さ、機械と人間の調和の重要性を感じたものです。

■ パイロットの判断は正しかったか？

さて、映画はここから始まります。事故の後、国家運輸安全局による事故原因の調査が行われ、その中で果たしてパイロットの判断が適切だったのか、もっと良い選択肢があったのではないかと、との疑問が生じてきます。すなわち、ハドソン川への不時着という方法ではなく、近くの設定の整った空港へ引き返して着陸することが可能であったのではないかと、ということです。奇跡の生還を果たした立役者、英雄として称賛された乗員達が一転厳しい追及を受けることとなります。

もし、空港へ引き返す決断をして、うまくたどり着くことができなかった場合には、ニューヨークの市街地へ墜落、乗客はもちろんその他の市民多数を巻き込む大惨事になる可能性があります。一方、厳寒のハドソン川への不時着水は、市民の犠牲は避けられるかもしれませんが、乗客の命を大きな危険にさらすこととなります。さて、どちらを選択すべきだったのか？正に究極の選択です。映画では、フライトシミュレータによって、空港へ引き返すと無事に着陸できることが示されるのですが…。

結末はここでは明かさないことにします。興味がある方は、どうぞ映画をご覧になって確かめてください。

■ 究極の選択は想定外か？

さて、今話題のAIにこのような究極の選択を委ねるとしたらどうなるのでしょうか？もちろん、航空機の操縦が完全にAIに任されてしまうことは、当分はないのですが、例えば実用化に向かって開発が進められている車の自動運転のケースはどうでしょうか。ブレーキやエンジンが故障したときに、対向してくる子供たちが乗ったスクールバスとの衝突を避けて、歩行者が歩く歩道にハンドルを切るのでしょうか？どちらを選んでも犠牲者が出るかもしれない究極の選択について、自動運転を設計している技術者はどのように考えて答えを出そうとしているのでしょうか？

福島原発事故の後で、想定外という言葉が繰り返し語られました。上のような究極の選択を迫られることは、想定外なのでしょうか？あるいは、想定はされるが発生確率は非常に低いとして設計から除外するのでしょうか？それとも、対策に本気で取り組もうとすると投資額が巨大になってしまうから、そんなことはほとんど起こらないだろうと楽観的に割り切るのでしょうか？

■ 技術者の社会的責任

「ちょっとでも可能性がある、そういうものを全部組み合わせていったらモノなんて作れない」ということも一面事実です。そのために、設計には一定の割り切りが行われます。しかし、設計上で割り切ったことと、それが実際には起こらないことは明らかに違います。設計上で想定した条件と現実との間には必ずギャップがあります。そのギャップをはっきりと認識して対応策を準備しておく必要があります。事は技術論ではありません。開発者だけに委ねて良い問題ではなく、法律家や倫理学者など多様な人々が議論に加わって社会的なコンセンサスを探るしか方法はないと思います。そのためには、技術者は問題が何であるかを異なる専門分野の人たちに分かりやすく説明し、共に協力して問題の解決策を探る必要があります。技術者が自らの狭い専門分野に閉じこもるのではなく、異なる分野の専門家たちと連携し、一般の人たちとも理解を深めるなど、問題の解決策を探るべく、広く社会と向き合っていく姿勢が今まで以上に求められるのではないのでしょうか。